

## 資料 山之口獏：新資料および初出本文紹介

松下，博文  
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/10417>

---

出版情報：文献探究. 21, pp.58-66, 1988-03-25. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：



## 資料 山之口貌

### —新資料および初出本文紹介—

松下博文

僕は雑誌「人間」<sup>(1)</sup>に七篇の作品を発表していた。全容を列記しよう。

昭22・6 — 「土地1」 「土地2」 「土地3」

昭23・10 — 「葉の厠」

昭25・5 — 「桃の木」 「沖繩島」

昭26・2 — 「たねあかし」

うち「沖繩島」は新資料。思潮社版『山之口貌全集』未収録作品である。貌が積極的に故郷沖繩について語り始めるのは、敗戦後、それもサンフランシスコ条約第三条によって沖繩がアメリカの施政権下に置かれたときからである。正確には昭和二十八年に書かれた「祖国琉球」(「新潮」五月号)以後のことであるといふ<sup>(2)</sup>。

僕は、東京に住んでるので、その悲惨を直接には知ることも出来なかつたが、新聞の報道や風の便りや、または写真で見たり、機会あるごとに、琉球からの人に会つてきいたりして、想像するに余りあるものがあつたのである。きくところによると、国敗れて山河ありどころの話ではなく、地勢まで変り果て、樹木といふ樹木もみんなやられてしまつたといふことなのだ。五月ともなれば、琉球には梯梧の花が咲いた筈なのである。梯梧は大木で、その幹は、太人ふたりか三人ぐらゐでかゝるほどの太さで、花は真紅に、コバ

ルト色の空に燃える焔のやうであつたことも忘れることの出来ないもので、ガジマルの樹や福木も、いまでは殆んど見当たらないこととなっており、あらゆる文化財など、影も形もなくうしなつてしまつたのである。

(「祖国琉球」)

〈国敗れて山河〉無しという悲惨な状況をきく貌の心境はいかなるものであつたか。「沖繩島」のいささか中途半端な表現やいくぶん屈折した行末の語尾はその心境を如実に語つてはいまいか。〈果々の屍を踏んづけたりもしたのだが〉〈死人の罰などはなにひとついも／あたになかつたとおもつてゐるわけなので〉と連続して逆接と原因・理由の助詞を使用し前文と対比的に叙述してゆく語り口や最後をへそのやうに云つてへと云つたへと吐息にも似た言い切りを並記して終止する語調にわれわれはやり場のない怒りを押し殺し深い悲しみに耐えている一詩人の姿を読み取らねばなるまい。怒りが強ければ強いほど悲しみが深ければ深いほど詩的表現は感情とは逆方向に屈折し収束していつてしまふ。さらには文中の〈博士〉なる措辞は貌独自のアイロニカルな表現であるといふこともはつきり認識しておく必要もあろう。いうまでもなくここに登場する〈博士〉はものごとを客観視し学究的に分析してゆくタイプの人間であろう。当然、悲惨な沖繩の現状もかような目でしか見てはいまい。文中の〈博士〉の言葉から判断すれば人間的に温かく高潔で高邁な人物であることは決していえないのだ。<sup>(3)</sup>極めて意図的で意識的な人物の配置

であることに留意しなければなるまい。そしてさらには表題にも注意しなければならぬ。なぜ「沖繩」でなく「沖繩島」なのか。日本本土から遠く離れた孤島という意味だけでこの詩題を捉えるのはおそらく片手落ちであろう。思うに「硫黄島」「サイパン島」と同じく玉砕の島・死の島のイメージが付与されているのではないか。かようなことを総合的に把握して始めてこの一篇は読めてこよう。

沖繩に関する彼の作品はかなり多い。「沖繩よどこへ行く」「弾を浴びた島」「島」「不沈母艦沖繩」などはその代表的な例であろう。そしてやはり「沖繩島」も作品史的にはこの中に位置づけるべきであろう。先の大戦で過酷な犠牲を強いられた沖繩へのいたわりを基底にもっているという理由によって、ただ書かれた時期によってそれぞれ異相を呈することも確かである。詩人論的な立場からは仔細に検討し慎重に処理する必要があるであろう。今後の課題としたい。

他六篇については初出本文を紹介する意義についてのべておく。周知のように彼は推敲に莫大な時間を費やした詩人であった<sup>(4)</sup>。ゆえに全集刊行の際には草稿・初出・異文その他の文献学的事項の整理は最も重視されるべき点であったのだが現行の全集本はこの点の配慮を欠く。とりわけ、既刊詩集に収録されている作品群の初出誌紙名が明記されていないのはいかなる理由からか。本文研究の後れを招来した最大の原因はここにあるであろう。これまでテクストの嚴重なチェックを試みた論稿が全く見当たらないのはこのことと無関係ではない。今回独自に調査した資料を見て改めて少なくとも初出誌蒐集の必要性を強く感じた次第である。たとえばここに列挙した六篇の誌上初出形態と詩集収録初版形態(遺稿集『鮎に鱗』昭39・12・原書房)とを比較していただきたい。かなり大幅な本文の異同が認められるはずである。そしてそこに彼の詩質の変遷——特に文体やリズムの変遷——を知る上ですぐれて貴重な要素があることを了解

していただけるはずである。本文研究の基礎資料となるよう、また、その差異を理解しやすいうちにテクストに忠実に並載する。上段が「人間」掲載詩、下段が『鮎に鱗』収録詩である。なお、掲載誌の発行年月および巻号数は表題右肩に明記した。

最後に、七篇の詩作内容を伝記的事実に即して見てゆけば昭和十九年三月の長女泉の誕生(「土地2」)から同年十二月の妻の実家への疎開(「土地1」「土地3」)を経て二十三年七月に疎開生活を終え上京して(練馬の月田家)(「たねあかし」)に落ちつくまでの四年強の期間となることを付記しておこう。それぞれに彼の心境が鮮やかに反映されており極度の貧苦の中でその実生活を取り巻く暗い世相を厳しく視つめる詩人の姿(「桃の木」)と温かいまなざしを娘にそそぐやさしい父親の姿(「土地3」「葉の厠」「たねあかし」)の二面を見ることが出来る。戦中の混乱期から戦後の復興期にかけてのわが国の激動する波状の時間帯と深く重なり戦中・戦後を一人の人間が何を思いいかに生きてきたか。興味深い。

#### 註

- (1) 「人間」は昭和二十一年一月の創刊。二十六年八月に六巻六十七冊別冊四冊をもって終刊した。発行所は四巻まで鎌倉文庫。五巻から目黒書店に移行。同人は久米正雄・里見淳・川端康成ら。久米・里見らが大正中期に同名の同人誌を出していた関係から誌名はかく命名されたという。本誌は大正期の「人間」とは別。いわゆる第二期の「人間」と仮称されるそれである。

(2)

仲程昌徳「山之口獺の詩」詩碑建立記念講演論文から、「沖繩タイムス」昭50・5・3）および『山之口獺 詩とその軌跡』（法政大学出版局・昭50・9）参照。特に後著三三〇頁「注」には次のように記す。〈その前に「那覇人」（『東京新聞』昭一九年一〇月二五日）、「闘魚」（『産業経済新聞』昭和二十七年四月一四日）、「琉球の幽霊」（『農林春秋』昭和二十六年一二月号）等ありはするが、沖繩問題をとり上げて論じるのは「祖国琉球」以後である〉

(3)

獺の詩作で〈博士〉それに類する〈医師〉が登場するものに「ひそかな対決」「ある医師」などがあるがいずれも負のイメージで捉えている。

(4)

たとえば山口泉「父・山之口獺(3)」に次のような箇所がある。〈机の上を整理するにしても、座蒲団一枚置くにしても、全く同じことで、あだやおろそかにはしないのである。理想の形にびったりおさまるまでは、ああでもないこうでもないといじくりまわし、他人の眼にはまるつきり同じにしか見えないう動作をいくたびもいくたびも繰り返すのだ。原稿を書く場合は無論のこと、自分が書くこうとすること一字でも違ふと、たとえそれが原稿用紙の最初の行の最初の桁目であろうが最後の行の最後の桁目であろうが最早その紙は反古である。〈略〉机の上に行儀よく順に重ねられていった反古紙のほうは、ひとつの作品ができあがり次第そっくりそのまま束ねられ大切にしまいこまれるのだが、その紙数はいつも長編小説なみである〉（『歷程』昭48・7）。また仲原善忠「獺

さんの詩作」の中にも獺の酒中談として次のような箇所がある。〈ふと靈感に見まれて、一つの詩が出来上る。添削、書きなおし、破りすてる。又、書き出す。破りすてる。いらいらする。また書く。これを何十回とくり返す。原稿用紙が二三百枚、机のわきに散乱する。やっと出来上がるのが、あの短い詩ですよ〉（『仲原善忠全集』第三卷・沖繩タイムス社・昭53・1）参照。

—九州大学大学院博士課程—

〈新資料〉

昭25・5 第5巻5号

### 沖繩島

累々の屍を踏んづけたりもしたのだが  
死人の罰などはなにひとつも

あたになかつたとおもつてゐるわけなので  
宗教なんてのが影をひそめてゐるのだと  
島から来た博士はそのやうに云つて  
お寺なんかもなくやつたと云つた。

昭22・6 第2巻6号

土地 1

利根川を渡つて  
私鉄にのりかへると  
車内はいきなりこの土地らしくなるのだ  
やろう  
ばかやろこのやろと  
どの口からか必ずみたくにきこえてくるのでこの土地らしいのだ  
困まつたところに  
疎開したもんだと  
この土地うまれの女房にいふと  
女房はあわてて僕に云ひそこなつたのだ  
このばかやろがと云ひたいところ  
沖繩うまれの  
くせにだと。

土地(1)

利根川を渡つて  
私鉄にのりかえると  
いきなり車内が  
この土地らしくなるのだ  
やろう ばかやろ  
そんな言葉がやたらに耳にはいつて来て  
この土地らしくなってくるのか  
困つたところに  
疎開したものだと  
この土地生れの女房に話しかけると  
女房はいささかあわてたのだが  
このばかやろがと  
言いそこなつたみたいだ  
沖繩生れの  
くせにと来たのだ

土地②

ここが即ち女房の里なのか

東に柿の木

西には檜の木

南に栗の木まじりの松林で

北から東へかけては竹林だ

その竹林を裏にして

トタンの屋根をこころもち斜にかむつて見せた家なのだ

東京からの姿を認めると

奥にゐたばあさんが腰をあげた

女房の妹によく似た顔のおつとりしてゐるばあさんだ

赤ん坊のことをむかへてやらうと

両手をさしのべて縁側に出て来た

どれどれこのやろ

来たのかこのやろと。

土地②

東に柿の木 西には檜の木

南は栗の木まじりの松林

北から東へかけて竹林

竹林を背にしてそこに

古ぼけたトタンの屋根をかむつて

首をかしげてたたずんでいる家

ここがぼくらの疎開先で

女房の里の家なのだ

奥のくらがりにいた老婆が

腰をあげて縁側に出て来たのだが

よく来たなあど歯のない口を開けた

女房の妹によく似た顔だ

老婆は両手をさしのべながら

女房の背中の赤ん坊に言った

どれどれこのやろ

来たのかこのやろと言った

### 土地 3

住めば住むほど身のまわりが  
いろんなやろうに化けるのだ

つぎはぎだらけのもんべはいて

そこらを往つたり來たりしてみせる

ミミコのやろうもさうなのだ

疎開當時の赤ん坊だが

いつのまにやらこの土地を踏みこなして

鼠を見れば

ネズミヤロウ

猫を見れば

ネコヤロウで

おやぢの僕などみかけては

ヤロウバカヤロコノヤロなのか

化けないうちにこの土地を

引き揚げたいとは何日おもつてゐるのだが。

### 土地〈3〉

住めば住むほど身のまわりが  
いろんなヤロウに化けて来るのだ

疎開當時の赤ん坊も

いつのまにやらすっかり

ミミコヤロウになつてしまつて

つぎはぎだらけのもんべに

赤い鼻緒の赤いかんこで

いまではこの土地を踏みこなして

鼠を見ると

ネズミヤロウ

猫を見ると

ネコヤロウ

ときにはコノヤロバカヤロなどと

おやぢのぼくにぬかしたりするのだ

化けないうちにこの土地を

引き揚げたいとはおもいながらだ

## 葉の厠

— 農村風景 —

すも、みたいな  
お尻を出して

ミミコはそこにしやがんだが  
すぐめのまへに落ちてゐるのを見て

あわのほがある

へんだよと云つた

あわのほだもの

へんじやないよと云ふと

だつてあなかの

おべんじよ

わらなんだのにとさう云ふのだ

なるほどへんだよ

まはりがわらなんだのに

落ちてゐるのはあわのほなのだ

ミミコはそこでもういちどぐるりを見廻はしてゐたのだが

いきなりお尻ごともちあげて

わかつた

あつたと指さした

そこにはあつたよ

いつぼん

葉のやろうがいかにも

葉のふりしてまぎれてゐた。

## 葉の厠

青いもみたいな

お尻をまる出しにして

ミミコはそこにしやがんだのだが

ふとその踏み板の上にあるのを見て

あわのほがあるよ

へんだなと言つた

へんじやないよ葉の穂だものと言つと

だつていなかのおべんじよ

わらなんだのと言つたのだ

なるほどまわりが葉なんだのに

落ちてゐるのは葉の穂なのか

あたりを見廻してゐるとそのときなのだ

ミミコがお尻ごともちあげて

わかつたあつたと指さして言つた

いかにも一本の葉のやろうが

葉のふりしてまぎれていた



## 桃の木

時間々々になると

爺さんごはん

婆さんごはん

爺さん婆さんのそれぞれの膝元に古びた膳が運ばれてくるのだ

膳はいつでも

そこにとぼけてゐた

米のごはん外にも

思想の自由

言論の自由といふやうな

あふれげえるなどのつかつてはゐるのだが

なんのかんのと云へばすぐにも

だまつて食つてるとやられる仕組みの

配給だけがのつかであるのだ

爺さん婆さんはその日々をどこまで生きるか試めされて生きてゐるみ

たいに

口をあけては配給を食つてゐるのだ

ある朝のこと

膳になるにはまだ早かつた

庭には桃が咲いてゐた

爺さん婆さんは庭におりと腰の曲がりなど伸ばしてみたりして

ひらいた欠伸を

天に向けた。

## 桃の木

時間 時間になると

爺さんごはんです

婆さんごはんですとこえがかかり

ふたりの膝元にはそれぞれの

古びた膳が運ばれて来るのだ

膳はいつもとぼけていた

米のごはんの外にも

思想の自由

言論の自由といふやうな

あふれげえるとかものつかつてはゐるのだが

なんのかんのと言へばすぐにも

だまつて食つてるとやられる仕組みの

配給だけがのつかっているのだ

爺さん婆さんはだまつて

その日その日の膳にむかい

どこまで生きるかを試めされてゐるみたいだ

配給をこづいてはそれを食うのだ

ある日の朝のことなのだ

膳になるにはまだはやかつた

庭には桃の花が咲いていた

爺さん婆さんも庭へおりと

腰の曲りをのばしたりしていたのだが

天に向つて欠伸をした

### たねあかし

その日、一家は引越しのために  
ミミコを連れて上京した  
ミミコはあたりを見廻してゐたのだが  
ふたばんとまつて  
かへるんでしょといふ  
ぼくはミミコの知つたかぶり  
かぶりを振つてはみたのだが  
二晩泊りでかへつては  
また出てくるといふ風にして  
二晩泊りをくりかへしてゐた筈のぼくの上京をおもひ出してゐた  
さうかとおもふとミミコはまた  
こゝんちのはきだめ  
どこななのといふ  
おしつこなのかいときけばすなはちこまつたみたいにくつくりなのだ  
ぼくはいつものあの庭の  
落葉でもりあげたあの一隅を眼にうかべ  
いつでもそこにミミコをしやがませた  
あの婆さまをおもひ出してゐた。

### たねあかし

この日一家を引き連れて  
疎開地から東京に移り  
練馬の月田家に落ちついた  
ミミコはあたりを見廻していたのだが  
ふたばんとまつたらまたみんな  
いなかのおうちへ  
かえるんでしょときくのだ  
ぼくはかぶりを横に振つたのだが  
疎開当時のぼくはいかにも  
鉄兜などをかむつてはたびたび  
二晩泊りの上京をしたものだ  
ミミコはやがて庭の端から戻つたのだが  
とうきよのおにわつてどこにも  
はきだめなんか  
ないのかしらと来たのだ  
ぼくはあわてて腰をあげてしまい  
田舎の庭の一隅をおもひ出しながら  
おしつこだろうときけばすばり  
こつくりと来てすまし顔だ